

博士論文（要約）

論文題目 植民地朝鮮における近代的空間としての劇場と演劇界

氏名 李 知映

目次	
序章	4
序-1. 研究背景と目的	4
序-2. 先行研究検討と研究意義	7
序-3. 研究方法と本論文の構成	10
第1章 1900年代～1930年代の劇場の実態	13
1-1. 韓国初の官営劇場－「協律社」 <sup>ヒョンニョルサ</sup>	15
1-2. 官営劇場の協律社から民営劇場へ－「圓覺社」 <sup>ウォンガクサ</sup>	25
1-3. 国営企業の産物から民間人の産物へ－「光武臺」 <sup>ゴァンムデ</sup>	34
1-4. 民営演劇映画兼用劇場－「朝鮮劇場」 <sup>ジョソンククザン</sup>	44
第2章 「府民館」 <sup>ブミンゴァン</sup> の誕生	53
2-1. 設立に至るまでの時代状況と経緯	53
2-2. 施設概要及び運営方法	60
2-3. 「府民館」 <sup>ブミンゴァン</sup> と同時代の劇場	73
第3章 「府民館」 <sup>ブミンゴァン</sup> を通じた新たな試み	87
3-1. 「劇藝術研究會」 <sup>グダスルヨングヘ</sup> －柳致眞 <sup>ユチジン</sup> の試み	88
3-2. 「中央舞臺」 <sup>ジュンアナムデ</sup> と「高協」 <sup>コヒョプ</sup> －新劇と興行劇の調和の試み	132
3-3. 興行劇の新しい流れ「楽劇」	148
第4章 演劇統制政策と「国民演劇」	153
4-1. 演劇統制政策－取り締まりから統制まで	153
4-2. 「新体制」下の「国民演劇」	169
4-3. 「朝鮮演劇文化協會」と重要事業	186
第5章 植民地時代の産物の「府民館」 <sup>ブミンゴァン</sup> から韓国「国立劇場」へ	206
5-1. 「米軍政期」の文化政策（1945年～1948年）	206
5-2. 韓国国立劇場の設立経緯	228
5-3. 国立劇場の専属劇団「新協」	250
結章	258

参考文献	265
付録	271
<付録1> 「朝鮮興行等取締規則」	
<付録2> 劇団「現代劇場」の公演演目	
<付録3> 国民演劇競演大会の審査表	
<付録4> 国民演劇競演大会、参加作品台本に関する参考資料	

本文

5年以内に出版予定

## 参考文献一覧

### —日本語による資料

#### <定期刊行物>

『朝鮮総督府官報』、『京城彙報』、『朝鮮年鑑』、『新演藝』、『朝鮮と建築』、『毎日申報』、『国民文学』、『朝鮮』

#### <事典>

渥美清太郎（1980）『日本演劇辞典』展望社

#### <単行本>

川端源太郎（1910）『京城と内地人』日韓書房

戦時経済研究所（1939）『解説註釈戦時財政経済法令総覧』東京：戦時経済研究所

近藤釵一（1953）『新朝鮮読本』友邦協会

倉林誠一郎（1972）『新劇年代記—戦前篇』白水社

森田芳夫（1979）『朝鮮終戦の記録』巖南堂書店

森田芳夫・長田なか子（1979）『朝鮮終戦の記録：資料編』巖南堂書店

大笹吉雄（1985）『日本現代演劇史—明治・大正篇』白水社

大笹吉雄（1986）『日本現代演劇史—大正・昭和初期篇』白水社

梶村秀樹（1986）「植民地と日本人」『生活のなかの国家：明治』河出書房新社

木村健二（1989）『在朝日本人の社会史』未来

外務省条約局編（1990）『外地法制誌. 第8巻（制令 後編）』東京：文生書院、

村山知義（1991）『日本プロレタリア演劇論』ゆまに書房

土屋積（2005）「京城府民館の設計に就いて」『朝鮮及び満州 47』図書出版語文学社

#### <学術論文など>

青柳南冥（1913）「京城の市街」『新選京城案内』朝鮮研究会

井原麗奈（2010）「京城府府民館とは何か—植民地朝鮮に建設された公会堂」『公共文化施設の公共性に関する研究報告書』神戸大学大学院国際文化研究科異文化研究交流センター

### —英語による資料

#### <定期刊行物>

• Record Group 59, Records of War History Branch.

• Record Group 319, Records of the Assistant Chief of Staff, G-2, Intelligence

Library File, 1944~1954.

- Record Group 332, Records of the United States Theatres of War.
- Record Group 353, Records of Interdepartmental Committee in Science and Culture Cooperation, 1938~1948.
- Record Group 407, Records of the Adjutant General's Office, Administrative Services Division, Occupied Area Report, Special Reports Korea.
- USAFIK, The Summation of Non-Military Government in Japan and Korea, 1945~1946.
- USAFIK, The Summation of United State Army Military Government Activities, 1946~1947.
- USAFIK, The South Korea Interim Government Activities, 1947~1948.
- Records of US Theaters of War, World War II, US Army Forces in Korea, XXIV Corps, G-2, Historical Section, RG554, National Archives and Records Administration
- "Summation", U.S. Army Center of Military History
- Official Gazette, USAMGIK Ordinance No101, 31 August 1946.
- Official Gazette, USAMGIK Ordinance No193, 1 May 1948.

#### <単行本>及び<論文>

- Charles A. H. Thomson (1948) *Overseas information service of the United States Government*, Washington : Brookings, .
- Charles K. Armstrong (February 2003) "The Cultural Cold War in Korea, 1945~1950" , *The Journal of Asian Studies* 62, no.1

#### —韓国語による資料

#### <定期刊行物>

『皇城新聞』、『大韓毎日申報』、『毎日申報』、『ソウル新聞』、『朝鮮日報』、『中央新聞』、『東亜日報』、『朝鮮日報』、『京城日報』、『中外日報』、『韓国日報』、『日刊・芸術通信』、『開壁』、『人民科学』、『芸術』、『新東亜』、『新興映畫』、『東光』、『第一線』、『映畫時代』、『新時代』、『人民』、『劇芸術』、『三千里』、『東光』、『文章』、『文化芸術』、『新天地』、『한국연극 (韓国演劇)』

#### <事典>

東西文化篇 (2002) 『PASCAL 세계대백과사전 (世界大百科事典)』東西文化社  
斗山東亞百科事典研究所編 (2002) 『두산세계대백과사전 (斗山世界大百科事典)』13 斗山

韓国精神文化研究院編 (1991) 『한국민족문화대백과사전 (韓國民族文化大百科事典)』  
韓国精神文化研究院

### <単行本>

- 金允植 (1978) 『韓国近代文学思想批判』 一志社
- 金揆五 (1993) 「장르의生成・發展・消滅—문학사와장르변화 (ジャンルの生成・發展・消滅—文学史とジャンルの変化)」 『韓国文学史叙述의諸問題』 檀國大出版部
- 金美都 (1995) 『한국근대극의재조명 (韓國近代劇の再証明)』 현대미학사
- 金雲泰 (1998) 『日本帝國主義の韓國統治』 博英社
- 金東園 (2003) 『米壽커튼콜 (カーテンコール)』、テハクサ
- 金瑚然 (2004) 『한국연극의새로운인식 (韓國演劇の新しい認識)』 演劇と人間
- 金瑚然 (2009) 『한국근대악극연구 (韓國近代樂劇研究)』 민즈크인
- キム・ミンハン (1991) 『米軍政の公報機構の言論活動』、ナナム
- キム・ウンテ (1992) 『米軍政の韓国統治』、パクヨンサ
- キム・ソッキュン (1996) 『米軍政時代の国家と行政』、梨花女子大学出版部
- キム・ウンシン (1998) 『한국 최초의 101 장면 (韓國最初の101場面)』、カラム企画
- キム・ギョン、ウォン・ヨン진 (2000) 「米軍政期対南の公報政策—米国を移植しよう」、  
『米国は私たちにとって何だろう』、ベギ
- 検閲研究会編 (2011) 『식민지 검열-제도/텍스트/실천 (植民地検閲—制度・テキスト・実践)』 소미ョン出版
- ゴ・ソルボン (1990) 『証言演劇史』 ジンヤン
- 高錫珪 (1997) 「일제강점기서울중심부에나타난都市文化의특성 (日帝強占期のソウル中心部に現れた都市文化の特性)」 『韓国史学史研究』 나ナム出版社
- 崔南善 (1947) 『朝鮮常識問答—統編』 東明社
- 安鍾和 (1962) 『韓国映画側面秘史』 춘추사
- 朴晁 (1976) 『唱劇史研究』 白鹿出版社
- 朴珍 (1966) 『世世年年』 경화출판사
- 朴珍 (1977) 『동양극장시절, 남기고싶은이야기 (東洋劇場時代、残したい話)』  
朝鮮日報社
- 李瑞求 (1969) 『歲時記』 培英社
- 李杜鉉 (1981) 『韓国新劇史研究』 ソウル大学出版部
- 柳敏榮 (1996) 『우리시대演劇運動史 (われ時代演劇運動史)』 檀國大出版部
- 柳敏榮 (1987) 『韓国開化期演劇社会史』 세ムン사
- 柳敏榮 (1998) 『한국극장변천사 (韓國劇場變遷史)』 테하쿠사
- 柳敏榮 (1996) 『한국근대연극사 (韓國近代演劇史)』 檀國大学交出版部
- 柳敏榮 (2001) 『한국연극운동사 (韓國演劇運動史)』 테하쿠사

- 柳致眞 (1993) 『東朗柳致眞全集』 1～9、ソウル芸大出版部
- 梁承國 (1996) 『한국근대연극비평사연구 (韓国近代演劇批評史研究)』 테하크사
- 梁承國 (2001) 『한국신연극연구 (韓国新演劇研究)』 演劇と人間
- 張漢基 (2000) 『韓國演劇史』 東國大學校出版部
- 張源宰 (2005) 『한국근대극운동과언론의역할관계연구 (韓国近代劇運動 と 言論 の 役割關係研究)』 演劇と人間
- シン・アヨン (1999) 『한국근대극의이론과연극성 (韓国近代劇の理論と演劇性)』 테하크사
- シン・ボクリョン (2001) 『韓國分斷史研究 1943～1953』、ハウル
- 辛仙姬 (2006) 『韓國古代劇場の歴史』、열화당
- شم・지ヨン (1982) 「韓國民主黨關係資料」、『韓國民主黨研究 I』、プル피쯔
- ソウル特別市史編纂委員會編 (1999) 『서울 (ソウル) 建築史』 ソウル特別市史編纂委員會
- ソン・バンソン (2007) 『증보 한국음악통사 (增補韓國音樂通史)』 민속원 (ミンソクオン)
- 總務處行政管理局 (1980) 『政府組織變遷史』、總務處
- 徐恒錫 (1964) 『園學社以後の新演劇』 韓國藝術總覽
- 徐恒錫 (1987) 『韓國演劇史(1931～1945)』 徐恒錫全集 6 卷ハサン出版社
- 徐淵昊 (1997) 『植民地時代の親日劇研究』 테하크사
- 徐淵昊 (2003) 『한국연극사-근대편 (韓國演劇史-近代篇)』 演劇と人間、
- 徐淵昊・이・산우 (2005) 『우리연극 100년 (我々の演劇 100年)』 히ョン암사
- 이・산우 (2004) 『近代劇風景』 演劇と人間
- 이・스누 (2005) 『그들은 정말 조선을 사랑했을까? -일그러진 근대 역사의 흔적을 뒤지다 2 (彼らは本当に朝鮮を愛してたのか? -歪んだ近代歴史の痕跡をめくる 2)』 図書出版ハヌルゼ
- 이・미우온 (2003) 『國民演劇』 図書出版演劇と人間
- 韓國近・現代演劇 100 年史編 (2009) 『韓國近・現代演劇 100 年史』 짐ندان
- 韓國文人協會會編 (1964) 『解放文學 20 年』、정음사 (ジンウムサ)
- 韓國國立中央劇場編 (1980) 『國立劇場 30 年史』、韓國國立中央劇場
- 韓國國立中央劇場編 (2000) 『國立劇場 50 年史』、韓國國立中央劇場
- 韓國國立中央劇場編 (2010) 『國立劇場 60 年史』、韓國國立中央劇場
- 우・스진 (2011) 『한국 근대연극의 형성 (韓國近代演劇の形成)』 플린사산
- 한・쥬ン산 (1987) 「米国の文化浸透と韓国教育」、『解放前後史の認識』、한길사
- 벡・ナム (1946) 『朝鮮民族の進路』、新建社
- 民主主義民族戰線編 (1946) 『朝鮮解放年俸』
- 閔丙郁編 (1994) 『한국희곡사 연표 (韓國戲曲史年表)』 國學資料院
- ドルベゲ編集部 (1988) 『駐韓米軍史』 第 1 卷、ドルベゲ
- ドルベゲ編集部 (1989) 『分斷資料集 : 1945～1948 資料集め』 한벙크사



水曜歴史研究会編、(2005) 『일제의 식민지 지배정책과 매일신보 1910년대 (日帝の植民地支配政策と毎日報 1900年代)』 ドリメディア  
朝鮮人民党編 (1946) 『人民党의路線』 新文化研究所出版部  
ジョン・진소크 (2005)、『언론조선총독부 (言論朝鮮總督)』、コミュニケーションブック  
ジョン・진소크 (2014) 『극비, 조선총독부의 언로강압과 검열 (極秘、朝鮮總督府の言論弾圧と検閲)』 コミュニケーションブック  
関内郁編 (1994) 『韓国戯曲史年表』 国学資料院  
東国大学校文化学院韓国文学研究所編 (2010) 『植民地期検閲と韓国文化』 東国大学校出版部

### < 学術論文 >

金貞桓 (1968) 「圓覺社의規模와構造 (円覚社の規模と構造)」 『演劇覺報』 第二輯東國大学校演劇映画学学会  
金晶東 (1982) 「1940年代韓国演劇의動向－特に国民演劇競演大会と李光來を中心に」 『演劇學報』 第28輯図書出版エムエド 2000.6  
金晶東 (1982) 『韓国近代建築의生成過程에 관한研究 (韓国近代建築の生成過程に関する研究)』 相明大学校修士論文  
キム・ゼソク (2005) 「한국 신파극의 형성과 川上音二郎의 관계형성 (韓国新派劇の形成と川上音二郎の關係研究)」 『語文學 88』 韓国語文學會  
金芳玉 (1983) 「한국연극사에 있어서의신파극의의미 (韓国演劇史に於ての新派劇の意味)」 『梨花語文論集』 第6集  
金性希 (1983) 「1930년대 극예술연구회에 대한 연구 (1930年代劇芸術研究会に関する研究)」 梨花女子大学院修士論文  
金性希 (2000) 「国立劇團研究 (1)」 『韓国劇芸術研究』 第12集  
金瑚然 (2000) 「1930년대서울주민의문화수용에관한연구－府民館을 중심으로 (1930年代ソウル住民の文化受容に関する研究－府民館を中心に)」 『서울학연구 (ソウル學研究)』 15  
キム・ゼソク (2005) 「韓国新派劇의形成と川上音二郎의關係研究」 『語文學 88』 韓国語文學會  
ジョン・스нге (2000) 「1940年代韓国演劇의動向－特に国民演劇競演大会と李光來を中心に」 『演劇學報』 第28輯図書出版エムエド  
パク・ホン호 (2005) 『文化政治』 期新聞の位相と反一檢閲の内的論理」 成均館大東アジア學院 『大東文化研究』 50集成均館大学大東文化研究院 2005  
안・곤호 (1993) 『1920년대 전반기 조선청년회 연합에 관한 연구 (1920年代前半期朝鮮青年會連合會に関する研究)』 崇実大学院修士論文  
徐恒錫 (1977) 「韓国演劇史」 『예술원논문집 (芸術院論文集)』 17 芸術院  
ソン・반ソン (1995) 「府民館을 통해본 日帝末期의音樂狀況 (1941~1945을중심으로) (府

民館を通じて見た日帝末期の音楽状況（1941～1945 を中心に）」『震檀学報 80』震檀学会  
徐洙昊（1995）「홍해성의연출론고찰（洪海星 の 演出論考察）」『김기현교수 회갑  
기념논총（キムギヒョン教授還暦記念論叢）』

趙熙文（1992）「草創期韓国映画史研究：映画の伝来と受容（1896－1923）」中央大学  
校博士論文

チョ・ヘジョン（1998）『米軍政期の映画政策に関する研究』中央大学交大学院、博士論文

シン・アヨン（1989）「1930 년대 연극과 관객-大衆化論을 중심으로-（1930 年代演劇と  
観客-大衆化論を中心に）」梨香女子大学校修士論文

李銀美（1994）『1910 년～1960 년、경복궁에서 덕수궁사이의 가로와 가로변  
건축물의 성격변화에 관한 연구（1910 年～1960 年、景福宮から徳壽宮の間の街路と  
大通りの道端建築物の性格変化に関する研究）』明知大学大学院修士論文

ソ・ウンソン『일제강점기시대의단성사연구（日帝強占期の團成社研究）』상명대학  
교修士論文、2005

ノ・ギョンスッ（2008）『Palimpsest 을 통한 근대건축물의 재생방법 표현  
: 등록문화재 11 호 서울시의회(구부민관) 재생을 통한 예술센터 계획안  
（Palimpsest を通じた近代建築物の再生方法表現：登録文化財 11 号ソウル市議會（旧府民  
館）再生を通じた芸術センター計画案）』弘益大学大学院修士論文

#### <インターネット上の情報源>

- ・ソウル市議會ホームページ (<http://www.smc.seoul.kr/>)
- ・韓国文化芸術会館連合会ホームページ (<http://www.kocaca.or.kr>)
- ・「愛観、みることを愛する」(<http://blog.naver.com/ykhp/220909426767>)
- ・「朝鮮のお城写真展」<http://www.ohmynews.com/>

## 論文の内容の要旨

本論文は、大日本帝国時代の植民地朝鮮における近代的空間としての劇場に注目する。そしてその中でも、とりわけ朝鮮総督府時代の中 1935 年 12 月 10 日に開館される、京城府の府民のための劇場である「府民館」を取り上げ、府民館が当時の劇団の経営、演劇形式とその内容に与えた影響を明らかにすることを第一の目的とする。さらにこの府民館が、統治権力が日本から米軍政に変わっていく中、韓国国立劇場としてその姿を変えていく過程を考察する。以上を通じて、近代的空間としての劇場が当時の演劇界において如何なる役割と影響を果たしていたのかを明らかにする。本論では、次のように 5 章立ての構成をとって研究を進める。

第 1 章「1900 年代～1930 年代の劇場の実態」では、1900 年代から府民館が設立される 1930 年代までの劇場の実態について考察を行う。ここでは「協律社」、「圓覺社」、「光武臺」、「朝鮮劇場」の 4 つの劇場を取り上げる。韓国で西洋的な概念における文化空間「劇場」、すなわち屋内型の劇場が存在するようになるのは、20 世紀初頭のことである。韓国の公演様式が、そもそも祝祭的な演劇の伝統を受け継いでおり、神と人間、そして自然の調和の中で成り立つものであり、即興性が強調され、舞台機構の助けなしに上演を行っていたため、室内の上演空間は必要とされていなかった。しかし、屋内型の劇場の登場により、これまで野外で行われていた公演芸術が、狭く閉鎖された空間に押し込められるようになる。その結果、公演芸術は、大きく二つに区分されていく。上演形式として、劇場の中での上演が可能なものと、そうではないものに区分される。さらには、劇場での上演が不可能なものを可能にするため、形式を変えることも行われた。このような屋内型の劇場の登場は、演劇形式のみならず演劇内容においても変化をもたらすこととなる。以前までは観劇者の身分の違いにより見るものが区別されていたが、限定された室内空間の中で共に観劇することにより、内容がある程度制限されるようになった。また、集中力を高く維持できる室内空間の性質を活かし、演劇美学と舞台技術が発展していくのであった。

第 2 章「『府民館』の誕生」では、府民館設立に至るまでの背景と、建物の設備及び運営方法について調査する。また、府民館周辺の状況も視野に入れるため、同時代に建てられた劇場も合わせて考察を行う。当時の演劇界においては、劇場は制作された作品を発表する場所という単なる空間概念ではなく、舞台制作そのものを行う中核的で不可欠な存在として認識されていたが、植民地支配下においてはそれを実現する状況にはなかった。こうした状況を背景に、1935 年 12 月 10 日、当時これまでにない規模の施設を持った近代的文化施設である府民館が開館した。建物の各階は地下 1 階、地上 3 階で、大講堂、中講堂、小講堂など様々な付帯施設があり、複合的文化空間としては朝鮮内で最も充実した施設であった。また、京城の中心部に次々と劇場が建てられるようになる。「東洋劇場」、「團成社」、「明治座」、「黄金座」、「若草劇場」等がそれである。東

洋劇場は、演劇専用劇場として演劇の専属団体を設けており、外部の劇団の公演のために開放されることは滅多になかった。また、明治座をはじめとするその他の劇場は、日本人の所有である上に、映画の上演が主な目的であったため、演劇団体の使用には不都合が多かった。しかしそれらの劇場に対し、府民館は貸し出しを運営の基本方針としていたため、多数の劇団をはじめとする舞台芸術団体による様々な公演が行なわれたことが明らかになった。

第3章「『府民館』を通じた新たな試み」では、1935年から1939年まで府民館で行われていた演劇活動について、とりわけ「劇藝術研究会」（以下、劇研）、「中央舞臺」と「高協」という3つの劇団を取り上げ、そこで行なわれた新たな試みについて考察を行う。さらに、商業劇の新しい流れとして登場する「楽劇」という演劇ジャンルも取り上げ、府民館との関係についても考察する。劇研は日本で海外文学などを学んできた留学経験者が中心となって組織された劇団である。演出家洪海星と柳致眞の二人が中心となって、演劇を通じて民族の教化を目指す公演を主に行っており、この劇団は、かつては知識人や学生といった一部の観客だけに受け入れられていた。しかし、そのことに対する反省もあって、劇研の代表柳致眞は観客中心の演劇という「観衆本位論」を主張するようになる。さらに柳致眞は、大劇場に適合する「上演様式と劇作技法としての浪漫主義」を提唱し、こうした実験と模索を通して、歴史劇と唱劇などの伝統的な演劇形式を府民館で試みる。このような劇研の活動に刺激を受けた劇団「中央舞臺」と劇団「高協」は、それまでの大衆性が強い商業劇のスタイルではなく、大衆性と芸術性のバランスがとれた舞台創造を目指し、「中間劇」という新しい演劇ジャンルを提唱するようになる。また、公演上演中、幕と幕の間に行なわれた「幕間劇」というものがあつたが、府民館で上演された日本の劇団「宝塚」の公演から演技や舞台構成等の刺激を受け、大きな公演空間を積極的に受容することとなり、一つの新たな演劇ジャンル「楽劇」を創設させた。

第4章「演劇統制政策と『国民演劇』」では、植民地朝鮮における演劇統制政策と、1940年前半期に行なわれた「国民演劇」に関する考察を行なう。演劇統制政策は、初期の劇場における衛生と風俗に関する取締りに続き、公演を行う前になされる「事前検閲」と公演中になされる「公演検閲」、さらに思想統制の一環として「脚本の検閲」が行われるようになった。そして1940年に入ると、「国民総力朝鮮連盟」の文化部傘下の「朝鮮演劇協会」により、国家が直接個人を指導、統制する方法へと、その政策の方針が転換されたことが分かった。日本政府が太平洋戦争に向けた「新体制」構築のもと国策を宣伝・扇動する手段として芸術を積極的に利用するようになるが、この時期に上演されていた演劇のことを「国民演劇」と言う。この動きは、国民演劇の理論樹立とその実践化に一層拍車をかけ、劇団「現代劇場」と劇団付設である「国民演劇研究所」を設立させた。「朝鮮演劇協会」に加入してないと活動が出来なくなることや国民演劇しか上演できない等の国家による直接管理、指導という演劇統制策を、当

時の演劇人は一種の支援政策としても受け取っていた可能性はなくはない。実際に「朝鮮演劇文化協会」の主要事業であった移動演劇隊及び国民演劇競演大会などを通じて、従来では得ることが出来なかった演劇界に対する国家次元での支援がみられる。このように、当局の強い圧力と懐柔、そして演劇人の内的要求の結果として「国民演劇」は展開される。植民地時代の演劇統制政策と1940年代前半期の「国民演劇」という二つの要素が別々に進行していたのではなく、一つの目的の下で動いたことが分かった。

第5章「植民地時代の産物の『府民館』から韓国『国立劇場』へ」では、朝鮮における統治権力が日本から米軍政に変わった1945年8月15日から1948年8月15日までの約3年間の「米軍政期」における文化政策と時代状況、その中で推進されていく韓国国立劇場の設立の経緯と過程について考察を行う。米軍政の占領初期は、全般的な占領目的の下で文化の問題が扱われていた。すなわち、文化政策の独自の問題設定や展開がなされたのではなく、米国の対外政策・戦略と米軍政の占領政策という限定的目的で行われていたことが分かった。占領後期になると、反ソ反共に依拠した左翼運動に対する強い弾圧と、米国文化普及のための宣伝活動により力を入れることとなった。結論としては、米軍政の文化政策は米国の政治・軍事的利益を擁護するため、企画・管理されたといえる。このような状況の中、韓国国立劇場が構想されることになり、実際に設立されるのは、大韓民国政府樹立（1948年8月）後の、1950年4月29日である。1949年末の米軍撤収に伴い、当時米軍の娯楽場として使われていた府民館が国立劇場として開館する。かつて活発な演劇活動を府民館で行っていた当時の演劇人は、府民館が国立劇場として指定されることを希望していたので、この決定は願ってもないことであった。しかし、この国立劇場の設立においては、芸術を政治的に利用しようとする大韓民国政府の意図が含まれていたことが分かることになる。すなわち、国立劇場の運営を、芸術家たちの要求だけではなく国策の意図を効果的に伝えるための、国民を教化する場として活用する意図があったのである。そのことは演劇人たちの闘いが続いていくことを意味している。

以上のような考察を通じて、植民地朝鮮における近代的空間としての劇場の誕生こそが、劇場の境界を行き来しながら、劇団、演劇形式、演劇運動、そして文化政策に、新しい変化を呼び起こしたことは明らかである。特に、1930年代中盤以降の演劇界においては、府民館での演劇活動を通じて素材の発見、ジャンルの多様化が試みられており、それらがさらに演劇界を豊かにしたことは間違いない。そして府民館は、1940年以降国策によって制限された作品しか上演できない空間へとその性格を変えるものの、依然として積極的な演劇活動を展開していた演劇人たちにより、大韓民国政府樹立後の国立劇場の設立が導かれたのである。府民館において行なわれた演劇活動が、韓国演劇に多大な貢献をしたことが明らかになった。